

でくれるから、この4年は無駄ではなかった」と話してくれました。今も常連さんになってくれ、ゆったりコーヒーの飲める憩いの場所として足を運んでくれます。

店を始めた時は仕事に必死過ぎて、家が散らかり放題。10年経った今、ようやく暮らしに目を向け、自分らしく生活することができています。

大変だった冬の雪寄せも、年を追う毎にコツをつかみ、楽しさを感じられるまでになりました。近所の方に「本当に雪寄せ上手くなったな」と言われた時は、この土地に住む住民として認められたように感じました。「ここに住み、一番嬉しかった言葉です」と話す飯高さんは笑顔で答えてくれました。何気なく語ったその一言は、そつと暮らしを見守る地域の方々の温かさそのもの。日々の暮らしもお仕事も地域の方々の存在なくしては語れないのだということ。決して「楽」とは言えない秋田の暮らしだからこそ、自分の成長を実感し、楽しむ術を身につけていくことが大切なことを飯高さんは体現されています。

気さくで会話の楽しい飯高さんに会いに角館にある「有頂天喫茶」へ足を運んではいかがでしょう。



コーヒーを丁寧にを入れる飯高さん



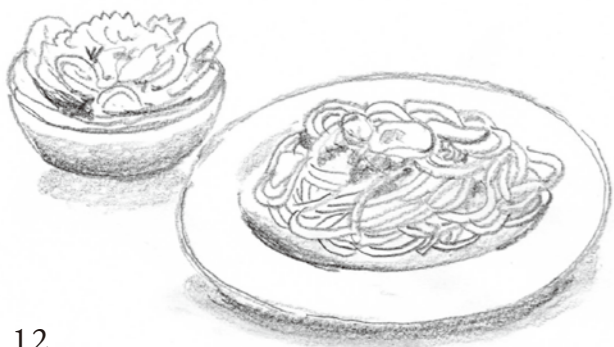
手作業で焙煎した豆はドリップする直前でひかれる



これぞ至福のいっばい



有頂天喫茶の大人気ナポリタン! やみつきになります



季節メニューもあります

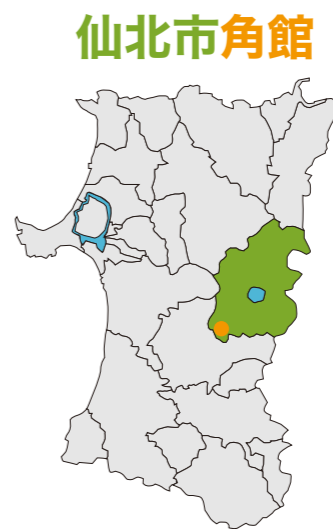


仙北市角館で「有頂天喫茶」という喫茶店を営む飯高さん。大学を卒業後、設計士として主に住宅などの設計に携わっていました。その中でインテリアという分野に興味を持ち、自分なりの表現として「人が居心地の良い空間」を作りたいと思い始めました。それがどうして喫茶店に行き着くかというと、そこには飯高さんが幼い頃、喫茶店の雇われオーナーをしていたお母さん存在がありました。小学校帰り道、よく寄り道をしていたその喫茶店は、飯高さんの中にとっても居心地の良い空間としてずっと記憶に残っていました。そしてさらに、ではなぜ秋田かという疑問が残ります。「温泉が好きで何度か秋田を訪れている中で空気も綺麗なこの土地でコーヒーを入れることができたら最高だな」と思い始めました。

画して2010年、満を辞して秋田に来たのは良いもののすぐに開業というわけにはいきません。市役所の臨時職員や温泉旅館の中居さんと下積み時代は続きます。「でも、地域の人と出会う機会がたくさんあっていろんな方



ご自宅は田沢湖田沢にあり、雪寄せがうまくなった飯高さん



とコミュニケーションが取れていたんですよ。だからお店をオープンした時はみなさんすでに知り合いで、そうしてお店に足を運ん

人生も有頂天でいたい
飯高二枝子

Idaka Mieko

冬も楽しく、
秋田の暮らし